

開催地名	奈良県 三宅町
開催日時	令和6年12月1日(日)10:00～11:30
開催場所	三宅町文化ホール
語り部	池田 雅彰(大阪府吹田市)
参加者	町民50名
開催経緯	三宅町は大規模災害に見舞われた経験もなく地域住民や職員に防災意識や危機感が希薄していると感じることが多く、災害を直接体験した経験談を伺うことで災害を自分事として捉えてもらい防災意識向上を図った。
内容	■ 自己紹介・吹田市紹介 講師は吹田市消防本部に所属する消防士であり、これまでに阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震など、多くの大規模災害に携わった経験を持っている。災害発生時の現場対応に従事しながら、地域住民への防災啓発活動にも力を入れてきた。 吹田市は大阪市の北部に位置し、人口約38万人を有する都市である。1970年には日本万国博覧会(大阪万博)の開催地となり、その後も交通網の整備が進み、医療機関も充実するなど、住みやすい環境が整備されている。 ■ 阪神・淡路大震災 1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、甚大な被害をもたらした。都市部では火災が次々と発生し、消防隊による消火活動は困難を極めた。特に、道路の寸断や倒壊した建物による障害が救助活動を大きく妨げた。しかし、そのような状況の中で、地域住民は自発的に炊き出しを行い、助け合う姿が多く見られた。この震災の経験を教訓とし、全国的な災害対応の強化が進められた。特に、緊急消防援助隊の結成が実現し、各地の消防機関が連携して迅速な救助活動を行う体制が整備された。 ■ わがごと意識 災害はいつどこで発生するか予測ができない。防災を「他人事」とせず、「わがごと」として捉える意識が求められる。そのためには、災害発生時の具体的な行動を事前に決めておく「行動のパッケージ化」を進めることが重要である。個人だけでなく、家族や地域全体で防災に取り組むことで、より確実な安全確保が可能となる。地域住民同士の協力が、防災力の向上につながることを改めて認識する必要がある。 ■ 東日本大震災 2011年3月11日に発生した東日本大震災では、巨大な津波が沿岸部に押し寄せ、広範囲にわたって甚大な被害をもたらした。講師自身も緊急消防援助隊の一員として現地に入り、救助活動に従事した。現場では、津波の恐ろしさを目の当たりにし、改めて防災の重要性を痛感したという。特に、避難行動の遅れが生死を分ける事態を引き起こしたことから、迅速な避難の必要性が強調された。また、津波による建物の倒壊や広範囲の浸水など、地震による直接的な被害に加えて二次災害の恐ろしさも学ぶ機会となった。 ■ 熊本地震 2016年に発生した熊本地震は、大きな被害をもたらした。特徴的だったのは、本震の後も長期間にわたって余震が続き、住民の不安が拭えなかった点である。特に、建物の倒壊による直接的な被害だけでなく、地盤の緩みによる土砂災害の発生が追い打ちをかけた。こうした状況の中で、救助活動の実施と同時に、地域の消防力を維持し続けることが重要な任務となった。加えて、避難所運営の課題として、被災者のプライバシー確保や衛生環境の管理、物資の適切な配分が挙げられた。これらの教訓を踏まえ、今後の避難所運営には、より計画的かつ柔軟な対応が求められる。 ■ まとめ 過去の災害から得られた教訓を学び続けることは、極めて重要である。災害は決して遠い出来事ではなく、いつ私たちの身に降りかかるかわからないという現実を受け入れなければならない

	い。そのためには、自宅での十分な備えと、地域での協力体制の構築が不可欠である。特に、緊急時に冷静な行動をとるためには、日頃からの防災意識の向上が求められる。地域全体で防災に取り組むことによって、安全なまちづくりを実現し、被害を最小限に抑えることが可能となる。今後も防災への意識を高め、一人ひとりが「わがごと」として備える姿勢を持つことが求められる。  
開催地より	実際に被災地で活動されている内容を聞き、三宅町で大規模災害が起こったときに職員として、一般人としてどう行動するか何が出来るかを考える貴重な機会になったと思います。同じ事を、参加者全てが感じ自分事と捉え考えてもらえたと感じます。